

あうん語法 (II) : 迅速和語表現法の工夫について

村 岡 潔

〔抄 録〕

前回同様、本稿も和語(日本語)の短縮化の試みを提案し、諸賢のご批判を仰ぐものです。

第I節では、前稿のあうん語法の趣旨のまとめと、あうん語法の意図するものと速記法との密接な関係について示しました。特に、日本のV式速記と英語圏のペイカーの速記テキストとの類似点を比較しました。あうん語法は、速記と組み合わせることにより、今後スピードアップが期待されるものと考えました。第II節では、イアン・ハッキングの『言語はなぜ哲学の問題になるのか』の日本語版序文を参考に、言語の公共性と私秘性について考察しました。そして、筆者の提唱する「あうん語法」が、ヨーロッパの19世紀以降の公共性、すなわち意味の全盛期よりも14世紀以前に観られた観念の全盛期における私秘的(プライベート)な姿に近いものを彷彿とさせる点に言及しました。最後の節では、前稿で提唱したあうん語法の文法にもとづいて、俳句や対話の一部のあうん語法への翻訳を例示しました。今後は、速記法とも組み合わせ、実地にSNSで試用しながら、さらに充実したあうん語法のシステムを実用に耐えうるものに近づけたいと思います。

キーワード あうん語法、速記法、言語の私秘性と公共性、文脈依存性、俳句

I. 前稿のまとめと速記法と密接な関係性

本稿は、前回同様、和語(広義の日本語)⁽¹⁾の短縮化の試みを提案し、諸賢のご批判を仰ぐものです。前稿では、日本語の短縮化の試みは、まず視覚障害者に対する情報保障の一環⁽²⁾として発想しました。しかし、それ以外の人々がメールで使う書き言葉(一般にノート速記やツイッターなど)でも字数・書き時間の短縮、あるいは、ALS(筋委縮性側索硬化症)のような人のコミュニケーションでも利便性が図れるように試作するものです。ついで、短縮化の試みである「あうん語法」の基本的な文法機能とその使用法を、例文を示しながら解説し、普通名

詞・固有名詞、形容詞、動詞等々の品詞について、和語からあうん語法への変換の仕方について簡潔に示しました。その後1年間、あうん語法を、筆者の周辺で実験的に使用してみましたが、まだ実用の域には到達していません。

そこで、本稿の目標としては、音声だけでなく視覚に訴える面でもその表現方法を工夫することにします。特に、学生のボランティアのノートテイクーにとって必要性の高い速記の役割を果たす用途について見て行きます。なお速記にも複数の様式があるようですが、速記士・小谷征勝のV式の特徴としては「同じ母音 (Same Vowel) を含む音(あかさたな等)は同じ方向 (Same Direction) の線であらわされます。そこで、その頭文字をとってSVSD方式(略してV式)と称されます。」また「V式は、…『日本語』面での音韻法則、文法、語彙、音の使用頻度等々、書くものと書かれるものの性質を配慮した方式」だと言います。²⁾

五十音図 [行列の表]⁽³⁾では、具体的には次のような書き順の方向性があります。あ行は、「あ・い・う・え・お」；か行は、「か・き・く・け・こ」・・・ですが、一方、「あ・か・さ・た・な」は「あ列」、「い・き・し・ち・に」は「い列」；・・・となります。V式では、これらの文字を線描します。「あ列」は { / }、 「い列」は { < }、 「う列」は { \ }、 「え列」は { ↓ }、そして「お列」は { → } です。この場合、矢印は方向性を示すためのもので、速記自体では、矢印の頭(>)は書きません。さて、各字には、長・中・短の長さがあります。短を全角一字分の長さとするれば、中はおよそ二字分、長はその二倍の四字分となります。また、各行の線には、区別のための特徴があります。まず「あ行」「た行」「や行」は直線ですが、「あ行」は中、「た行」は短、「や行」長です。「か行」「さ行」「は行」は下に凸の曲線 { u } ですが、長さは、か行は中、さ行は短、及び、は行は長です。「わ行」も同族ですが「ワ」の逆さまで { u } のように下に凸が短で深いです。「な行」「ま行」「ら行」の曲線は上に凸ですが、「な行」は中、「ま行」は長、「ら行」は短です。なお、上から下に書き下ろす「い列」と「え列」では下に凸の曲線とは、具体的には「く」のように左に曲がっていますし、上に凸の曲線とは、逆に右に曲がっています。なお「撥音ん」は小円(○)で表します。濁音は例えば「ノ」に「メ」のような「切り線」を入れて表します。切れ線は、必ず斜め右下に向かう短で斜体です。さらに「促音(っ)」は、前後の文字線の「交差」または「平行」で表します。³⁾ 例えば速記体「し」 [=てそ] ならば、交差筆記体「t」は「でそ」となり、平行速記体「二」は「とつ」となります。⁽⁴⁾

こうした速記を使用することはノートテイキングの時間を短縮することができることはすでに周知のとおりです。しかし、この速記でも、やはり発話された音を忠実に記録していくので文章として再現する時には、ふつうの文字で書いたものと同様の長さになってしまうと言えるでしょう。本稿では、この通常の文体を「逐語文」とし、長さを「逐語長」と呼ぶことにします。ですから、この速記と筆者の提唱する「あうん語法」を併用することでさらに伝達のスピードが逐語長よりは加速されることは間違いありません。例えば、後者では4文字の《あ

はたん》⁽⁵⁾は、逐語長では「私は幸せでした(11文字)」という意味ですが、速記では、この4文字がさらに短縮してすばやく書けるからです。

同じことは手話でも言えます。手話で「助詞」を省く場合は、ふつうの文章よりはその分だけ短くはなるでしょうが、表現スタイルは逐語文に近いものです。しかし、あうん語法と組み合わせることで、やはりコミュニケーションの時短化が可能になるはずでず。なお、手話の場合、視覚に依存する表現方法であるため、発音による聴覚依存の場合より表現スピードが速いことは言うまでもありませんが、それがさらに速まるということです。ただし、手話は視覚障害者には言うまでもなく有効ではありません。

視覚障害者向きには点字がよく知られていますが、点字にもあうん語法は利用可能です。点字も逐語文の要素が多いですから、あうん語法との組み合わせはコミュニケーションスピードを速めることになるでしょう。これは、あくまでも思考実験ですが、コンピュータ・チップを利用することによって点字の各点の温度の高低差によって「文字の色彩化」も可能になるでしょう。パソコンのディスプレイのような広い画面の全体を点字用のドットに置き換え、そのドット全体で色彩化をはかれば、触覚によって環境世界の「映像」も訓練次第で脳で知覚できるようになる可能性があります。

速記に戻りますが、英語でも日本語のV式と同じように、線描で書くのが通常のようにです。⁽⁴⁾⁽⁶⁾一方、ヘザー・ベイカーの速記のテキスト⁽⁵⁾は、上記のような線描ではなく「速記に対する21世紀的選択肢(The 21st Century alternative to shorthand)」といった副題にもうかがわれるように、従来の線描ではなく、主に英数字の小文字(1~2字;多くても4~6文字)で記述する点がこれまでのものと異なっています。線描では、WORDなどのワードプロセッサによる記述は非常にしにくいものですが、ベイカーの速記はそれを可能にしています。ベイカーは、その速記は最短6時間で習得できるとし、後半に最小限度の基本単語約400語弱を辞書に登録しています。例えば、r = are; u = you; hv = have; k = can; ie = that is; m = me; v = very; wl = will; bk = back; e_c = each; te_c = teach; ^cpr = compare; ^b = able; d^g = doing; wrk^g = working; in^{nl} = international; oⁿ = ocean; rla^{np} = relationship; so^s = social; 4 = for、等々のように、あうん語法での省略形の作成方法と似ている部分が多いです。あうん語法と同じく、各単語に特徴的な音素(とくに子音)を残すことで他の言葉との聴覚や視覚による鑑別に有効となっていると言えます。ただし、単語の識別、ひいては文章の意味(文意)の識別は、その背景となる文脈(context)にも大きく依存しています。この文脈の問題としては、短縮和語としてのあうん語法そのものの特徴にかかわってきますので、次節で論じることになります。

II. あうん語法の公共性と私秘性をめぐって

あうん語法は、基本的に和語(近代日本語)の文法や語彙にもとづいており、日本語における、一つの SNS と言えます。ここで問題になるのは、言語の公共 (パブリック) 性と私秘(プライベート)性の相違です。一般に言語が標準的であるとは公共的であることと言えます。両性の関係性は、日本全国という場においては、共通語(標準語)対方言ということになります。世界という場においては、国際語と各国・各民族の内部での使用言語という関係になります。ザメンホフのエスペラントは、目的は国際語という公共性であり、誰もが共通に理解しコミュニケーションが成立することをめざしたものでした(もっとも、実際は、国際通貨同様、影響力の大きい、英語・中国語・アラビア語などは準国際語として流通していますが)。

それに対して SNS は、あまりそうとは理解されていないようですが、基本は私秘的な言語と言えます。短縮形・省略形でも意味が伝わりやすいのは身近な人々同士での会話の特徴です。かつて筆者が脳外科病棟で勤務していた時に受け持った脳卒中(左大脳から脳幹にかけての脳内出血)の術後の患者がいました。彼はその後遺症で不完全な失語症に陥っていました。私や同僚の医師・看護師は、その患者との意思疎通はとても困難でしたが、妻には私たちとは違って充分コミュニケーションがとれており、回診の時なども専ら妻が「通訳」をしてくれました(むろん、それは妻の解釈を含んではいたでしょうが)。この例は、私秘的言語の特異性を示しています。こうしたミクロの空間でも、言語の公共性と私秘性の差が出現するのです。

あうん語法も、実は、言語の公共性よりも私秘性に重点が置かれています。このような家族・恋人・友人あるいは職場の同僚同士の間での文脈依存性 (high context) が高いミクロの空間に向けた用語法なのです。イアン・ハッキングはその著『言語はなぜ哲学の問題になるのか』の「日本語版への序文」の中で、この問題の奥深いところについて次のように述べています。

「[本著はほぼ時代順に書かれているが、] そこには一つの恐ろしいギャップが存在している。…つまり『観念の全盛期』と『意味の全盛期』の間にあるギャップである。

「問題はこうである。私が観念の全盛期と呼ぶ時期においては、言語は本質的に私秘的(プライベート)なものと考えられている。ホプソンの印象深い表現が言うところの『精神的言説(メンタル・ディスコース)』が公共的な意思伝達に先行し、その基礎となっているのである。私のうちには一つながりの観念 [イデア] が存在し、それは我々の経験を表象しているばかりではなく、私の思想そのものに関わりをもっている。我々はたまたま我々自身の観念に言葉を結びつけることができる。このことは、二つの『便利な』結果をもたらす。第一に我々は自分の思想の連鎖において、自分自身のために記憶を呼び戻すことができる。第二に、我々は、私 [傍点原文、以下同様] の精神のうちなる観念をあらわしている言葉が、あなたの精神のうちなる観念を表すようにとすることができ、それによって、

互いに意思の疎通をはかことができる。」⁶⁾

筆者の解釈では、あうん語法における私秘性は、ハッキングが言うこの観念の全盛期の言葉に通底するものがあると思われます。彼はさらに続けます。

「十七世紀のヨーロッパの哲学者たちは、今述べたように、言語を本質的に私秘的なものであると考え、それは付随的にのみ(そして運よく)公共的でもあると考えた。我々は [十九世紀のゴットロープ・] フレーゲ [1848-1925] の場合を考えただけでもこれとは非常に違ったものを見出す。言語は本質的に公共的(パブリック)な何ものかであると見なされるようになった [からだ]。

「彼 [フレーゲ] の意味の理論は、我々が個人的に言葉に結びつける観念については何の注意も払わない。…フレーゲはそのかわりに、我々の用いる言語の指示対象—それは典型的には、我々がそれについて話している客観的な対象である—について教える。[さらにフレーゲにとって最も重要な] 言語がもっているところの公共的意味、公的に分有された何物か、すなわち『意義(Sinn)』に関わっており、この意義が人から人への思考の伝達、あるいは世代から世代への思考の伝達を可能にする、とされる。言語の可能性そのものにとって本質的なものは、この公共的で『客観的』な意義である。

「[フレーゲのいわゆるプラトニズムによれば]、時として客観的な思考(Gedanken)が、ちょうど算術の定理がそれを証明する者が誰一人いなくても客観的真理を有するであろうのと同様に、一種の超-人間的な存在をもちうるかのごとくに考えがちであった。我々はこのような数理哲学上の考察によって、フレーゲにとっては『思考』や『意義』が、十七世紀における言語をめぐる反省においてそれほど重要な位置を占めた『観念』とは根本的に対照的なものであった、という事実に対する目をくもらされてはならない。」

このことは、国民国家(nation state)の成立過程と重なっていると言えましょう。日本は、ちょうどそれが明治期に相当するわけですが、そこで「国民」のアイデンティティを確かなものにし、かつ、教育などを通じてその支配に不可欠なのが公共的言語、すなわち「国語」なのです(歴史に関しても、東京大学では、確か、1970年代に至るまで、「日本史」とは呼ばず明治以来の「国史」と言われ続けていました)。

一方、21世紀における日本語は、公共性を保ちつつも、年代や階層別の私秘的な言語としての役割が拡張ないしは復活してきているように思われます。特に、中国伝来の文字であった漢字に代わって、戦後、使用頻度が多くなったアルファベットもカタカナではなく、いわゆるローマ字そのもの(a,b,c...z)が日本語に混在するようになっていきます。商品名、タレントや歌手名、会社名などがそうですが、世代や背景が異なる場合、かつてないくらいに狭いミクロの空間でしか共有できない傾向、私秘性が観られるようになってきていると思われます。これがツイッターやフェイスブックなど、インターネットの普及に伴い、公共的空間に発信ないしは露出されるようになっていきます。これらの情報のうち、大多数は私秘的なものと思われますので、

たまたまインターネットに発信できたというだけでは、決して公共性を獲得したことにはならないのです。そのような SNS が万人に共通であろうと欲するとき、SNS 自らがその機能を低下させる危険性があるように思われます。

いずれにしても、SNS のさらに迅速化をはかった一形態を目指す「あうん語法」は、文脈依存性の高い私密的なモデルであることを強調しておきます。すなわち、先述しましたが、繰り返すと家族同士、友人・同僚同士といった「ミクロの言語環境(日常生活)」でのコミュニケーションの迅速化を目指すものです。しかしながら、マクロ(巨視的)なで使用される国語(テレビ・放送・出版等々)で使われる文脈依存性が低い low context で公共的な語法の側面も使い方次第で活用が可能となります。

III. あうん語法と翻訳の問題点

さて日本語を短縮しあうん語法で短縮和語に置き換える際の問題点について若干考えてみたいと思います。あうん語法の私密的面での用法を考える上でヒントになるのが俳句の構法だと思えます。俳句は、文脈依存性が高い上に、既に完全な短縮形になっているからです。例えば、有名な芭蕉の句「古池や蛙飛び込む水の音」で見るとドナルド・キーン (Donald Keene) は、

The ancient pond

A frog leaps in

The sound of the water. ⁸⁾

と訳しています。あうん語法では、前稿で試みに挙げた文法に準拠すると、

《オドいけ／カズごに／みお！や》

といったように長めなりますが、「古い池があつて、そこにカエルが飛び込んだ。水の音が響く」といった内容に比較すると短いと言えます。あうん語法では、単語は1音節か2音節に短縮するのが原則です。そこで、「カズ」=かわず、「ごに」= {行く+中に} ≡ {～に飛び込む/go-in}、「みお」= {みずおと}、「や」は感嘆詞「やばい」の省略形です。「！」は感嘆詞を表す記号で、読むときには「詠嘆」を表すような指示記号でもあります。

さらに James Kirkup は、つぎのように極端に短縮化しました。⁹⁾ すなわち、

pond

frog

plop!

です。これをあうん語法訳すると、

《いけ／カズ／ぼちゃ》

のようになります。「ぼちゃ」= {ぼちゃん} という擬音語です。この場合、拗音「ゃ」が詠嘆の「や」を代行しています。

さて、次に、ALS の患者と知人との対話¹⁰⁾の一部をあうん語訳してみましよう。

「ママは死にたいのではないでしょうか」

すると、橋本さんはきつい顔になった。

「死にたい人間なんていないよ」

「でも、もう母は TLS で何も伝えられないんです」

これを訳すと；

《「あそ／ママきしらん？」

エ橋本さ-かおきつたん。

「ひと-きし-のん」

「マ、はは-TLS いん/X [シ] なもせのん」》

となります。「あ」= {私}、「そ」= {想う}、「き」= {望む}、「し」= {死}、「らん」= {推量の状況を表す言葉(状況詞)} であり、「エ」= 「接続詞(順接)」、「さ」= {さん}、「きつ」= {きつい}、「たん」= {過去の状況詞} であり、「マ」= {接続詞(逆接)}、「いん」= {「なっている」ことを示す状況詞}、X [シ] = {彼女}、「なも」= {なに+も}、「せ」= {言う／伝える}、「のん」= {否定の状況詞} です。あうん語法では、「A は B である」は通常《A-B》のように表せ、be 動詞にあたる「び」を必ずしも使わなくてもよいです。

最後に、小林美津江監修・文の LL ブック『ぼくの家はかえで荘』からの一文を翻訳してみましよう。LL ブックとは情報保障のために小学生や認知症高齢者向けにわかりやすく書かれた絵本の総称です。

「ぼくは、お母さんと かっちゃんという 男の人と 3人で くらしていました。

お父さんとは 3ねんまえに わかれました。

ぼくは、家で かっちゃんになぐられました。・・・

子どもセンターの人は、ぼくに

『しばらく かえで荘という 子どもの施設で くらしましよう』と
言いました。」

これを訳すと、

《あ-くらいん-ははエおとこエあ-3人／ひせてん-かちや。

ちち-さたん-3年。

あ-なぐたん-てんかちや。・・・

ひとくたん-こどもせんた。

ひ-せたん／『しょ、あら-くらろん-かえでそ。』》

となります。「くら」= {暮らす}、「ひ」= {彼}、「てん」= {受け身の状況詞}、「かちや」= {かっちゃん}、「さ」= {さる}、「たん」= {過去の状況詞}、「なぐ」= {なぐる}、「てんかちや」= {「てん」の後の「かちや」によってなされたの意味}、「く」= {来る}、

「せ」 = {言う}、「しょ」 = {少し}、「あら」 = {私たち}、「ろん」 = {命令形を示す情況詞：〈私たちは命令〉は、「～しよう」の意味となります}、「そ」 = {荘} の意味です。

今後は、速記法とも組み合わせて、実地に SNS で試用しながら、さらに充実したあうん語法のシステムを実用に耐えうるものに近づける努力を重ねたいと思っています。

〔注〕

- (1) 本稿で言う「和語」は広義の日本語のことです。漢語やその他の外来語に対する日本固有の語「やまとことば」(狭義の和語)に対しては、本稿では「固有和語」として区別します。
- (2) 視覚障害がない場合は、PIC (絵文字)により情報保障は行われやすくなります。PICは「知的障害者」、高齢者、外国人のために日常生活や非常に時に必要な情報の提供を保障するためのものですが、視覚障害者には不向きです。そこで聴覚情報による情報保障を模索するものとして「あうん語法」の開発になったわけです。
- (3) [] 内は、筆者の注です。以下、同様です。
- (4) この他にも、伸ばす音の長音をあらわすのに、(・)をつけたり、末尾の○を大きく書いたりして「ん」と区別したりする工夫がなされています。
- (5) あうん語法の文章は、混同を避けるために一般に《あはたん》のように《 》をつけて表現します。
- (6) 筆者は、1981年秋に英国のバーミンガムにある病院を訪問し診察風景を見学した際に、速記者が医師と患者の診察中の会話を速記するのを拝見しました。医師は診察をしましたが、メモをとったりカルテに記載したりすることはありませんでした。1～2時間後、私たちが病棟の回診をすまして外来に戻ってくると、速記者はすでに先ほどの患者の診察内容をタイプで打ち出してカルテとして用意していました。医師は、それに目を通してOKと言いながらサインするだけでした。これなら、診察の手を休めてカルテに書き込み、診察を中断することなく十分時間がかけられるので、よいシステムだと感じました。現在でも日本にはないシステムと言えます。
- (7) ALS は、amyotrophic lateral sclerosis(筋委縮性側索硬化症)の略。「手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気です。…この病気は常に進行性で、一度この病気にかかりますと症状が軽くなるということはありません。体のどの部分の筋肉から始まってもやがては全身の筋肉が侵され、最後は呼吸の筋肉(呼吸筋)も働かなくなって大多数の方は呼吸不全で死亡します。人工呼吸器を使わない場合、病気になってから死亡までの期間はおよそ2～5年ですが、中には人工呼吸器を使わないでも10数年の長期間にわたって非常にゆっくりした経過をたどる例もあります。…1年間で新たにこの病気にかかる人は人口10万人当たり約1-2.5人です。」(<http://www.nanbyou.or.jp/entry/52>: アクセス日2016年10月10日)
また、TLSはTotally Locked-in Stateの略で、ALSの末期的状況を指しています。
- (8) 前稿で掲載した(表1)と(表2)を参考のため再掲しておきます。

(表1) 人称代名詞の一覧表

人称	単数		複数	
1	あ (A)		あら (Ar)*	
2	ゆ (U)		ゆら (Ur)*	
3	男性	女性	男性	女性
3人間	か(K)	し(X)	から(Kr)*/ぜ(Z)	しら(Xr)*/ぜ(Z)
3モノ	そ(S)		そら(Sr)*	

(注*) 「ら」は強調するとき以外は、軽く添えて一音節に近くなるように発音します。「あら」は [ある Ar] のように。この表のローマ字 (A, U, K, X など) は、メールなどの書き言葉で主語を明示する際に使用します。X は中国語のように Sh と発音します。主語は、文の中心点を示すため、原則、省略しません。

(表2) 主な情況詞の一覧表

情況詞	先行する文に対する意味・役割 [英語の類似語]
たん	・文意が完了していることを示す。・過去の内容であることを示す。
らん	・文意を推量していることを示す。[may, might]
みん	・文意が未来のことを示す。[will, going to]
のん	・文意全体を否定することを示す。[not]
かん	・文意が可能であること、あり得ることを示す。[can, could, be able to]
さん	・文意が類似していること(～のようなものだ)を示す。[likely]
ぼん	・文意が必要な(～しなければならない、すべきである)ことを示す。[must, should]
いん	・文意が進行形であることを示す。[～ing]
てん	・文意が受け身に転化することを示す
まん	・文意が敬語であることを示す
どん	・文意が命令形であることを示す
ぼん	・文意が仮定であることを示す(もし～たら、～場合)

【引用文献】

- 1) 村岡 潔 「あうん語法(I) ～汎用性短縮和語の試み」、佛教大学文学部論集、第100号、2016年、57-64頁、
- 2) 小谷征勝 『V式でらくらく合格 速記入門』オーエス出版社、1998年、40-44頁
- 3) 小谷征勝、前掲書2)、46-68頁
- 4) John Robert Gregg, et al: “Gregg Shorthand Manual Simplified (Second Edition),” McGraw-Hill Book Company, Inc., New York, 1955, pp. 10-65
- 5) Heather Baker: “Easy 4 me 2 Learn Speed Writing (The 21st Century alternative to shorthand. International/American English spelling version),” Universe of Learning Ltd., Lancashire, 2009, pp. 6-33
- 6) イアン・ハッキング(伊藤邦武訳) 『言語はなぜ哲学の問題になるのか』勁草書房、1989年、1-3頁
- 7) イアン・ハッキング、前掲書6)、3-17頁
- 8) http://hotonoha.blogspot.jp/2011/08/blog-post_1719.html
(アクセス日：2013年1月15日)
- 9) 同上8)
- 10) 川口有美子 『逝かない身体—ALS 的日常を生きる』医学書院、2009年、206-207頁
- 11) 小林美津江 『ぼくの家はかえで荘』社会福祉法人 埼玉福祉会、2016年、1-11頁

(むらおか きよし 社会福祉学科)

2016年11月15日受理